

# ひとはくトピックス

## 1

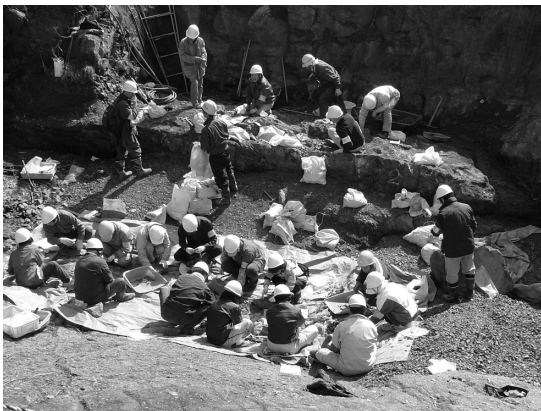
## 丹波で恐竜化石を発見！発掘を開始。

2006年8月7日に地元丹波市在住の村上茂・足立洌両氏により丹波市山南町上滝の篠山川河床から恐竜の化石が発見された。恐竜の化石を産出した地層は、篠山層群と呼ばれる約1億4千万～1億1千万年前に陸上で堆積した地層で、兵庫県篠山市および丹波市山南町に分布している。篠山層群からはこれまで淡水性の貝、カイエビ、植物の化石などの産出が知られていたが、脊椎動物化石に関する報告は皆無であった。両氏は化石の発見後、8月9日午前まで独力で肋骨一本と尾椎1個を発掘し、9日午後、恐竜の化石ではないかということで兵庫県立人と自然の博物館にこれらの化石を持ち込んだ。博物館研究員は両氏とともに同日直ちに現地に向かい、化石がまだ地層中に一部残っていることを確認した。



発掘された化石

県下での恐竜化石の発見は、2004年に淡路島で見つかったハドロサウルス類恐竜以来であった。しかし、淡路島の場合と異なり、化石の続きがまだ地層中にある状態だったので、2006年9月27日～29日に削岩機を用いてこの地点を試掘した。その結果、保存良好な竜脚類（首の長い大型の草食恐竜）の尾椎と血道弓が獣脚類（肉食の恐竜）の歯のかけらと一緒に産出し、竜脚類一頭に由来する骨がある程度まとまって埋まっていることが分った。そこで、2007年1月22日から3月31日の期間（準備および後片付け工事も含む）、ボランティア約60名とともに本格発掘を行った。



数多くのボランティアのご協力により進められる発掘作業

発掘面積は3×7mと比較的狭いものだったが、小さな骨片も含めると1200点もの化石が発掘され、その中には日本初である竜脚類の連結した尾椎十数個が含まれている。こうしたことから、未発掘の地層中にはさらに多くの化石、特に竜脚類の胴体、四肢、頸部さらには頭部の埋まっている可能性が高くなった。

本発掘に先立ち、1月2日に化石の産出に関して記者発表をし、あわせて臨時展示「丹波の恐竜化石」を行った。臨時展示としては会館以来の観客を集め、一時は展示ケースの前から館入り口まで行列が出来るほどであった。

## 2

## 新たな人と自然の博物館基本構想（案） についてパブリック・コメントを募集

人と自然の博物館はこの春、平成 4 年 10 月の開館以来 14 年目を迎えます。この間、京都議定書の締結と批准、阪神淡路大震災、コウノトリ自然放鳥、丹波市での恐竜発見など、人と自然の関係を考える上で重要な、さまざまな出来事がありました。こうした状況を背景に、博物館では平成 23 年を目標年次とした新しい博物館基本構想を元文化庁長官で作家の三浦朱門氏をはじめ、学識経験者のみなさまとともに 1 年余りの期間にわたって検討してきました。そして平成 18 年秋に、この結果を新たな「人と自然の博物館」基本構想（案）としてとりまとめ、ネット上に公開するとともに、平成 18 年 11 月 6 日から 30 日にかけて広く県民のみなさまからのご意見（パブリック・コメント）を募集したところ、県内外 24 人の方々からご意見をいただきました。



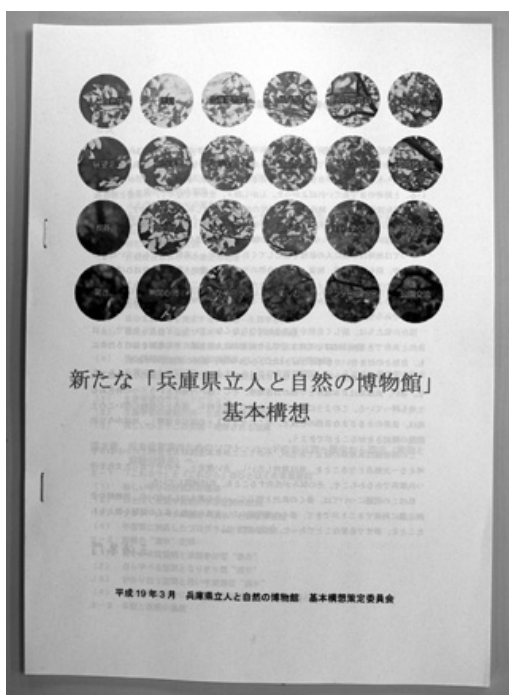
新しい博物館将来基本構想の検討会議の様子

新しい博物館基本構想（案）では（1）幼児から高齢者まで誰もが自発的に学べる生涯学習拠点の創出を目的として、（2）新しい展示コンセプトとして「演示」を提案。展示を活用した体験的学習プログラムの提供、（3）素人から専門家まで、幼児から大学院生・研究者まで、さまざまな学習進度に対応した博物館利用プランの提供など、これまでにない博物館将来像を提案しております。

いただいたご意見では、幼児期からの生涯学習機能を求める声、各成長段階に対応したプログラム提供を望むご意見、体験的な学習プログラムの提供を求める声などが多数を占めたほか、博物館の機能拡大に対応した組織体制の見直しや、全活動の基盤である研究活動の維持・活性化を求めるご意見がありました。

このように、基本構想（案）が目指す新しい博物館像に対して数多くの方からご支持いただきましたこと、また弊館の実績・取組みへのご理解、暖かいご声援を頂戴したことにたいへん感謝いたしております。

今回いただきましたご意見を元に、平成 19 年度には新しい博物館基本構想を確定し、具体的なプラン策定に向けての博物館の新体制が本格スタートいたします。引き続き、みなさまのお声を活かして参りたいと思います。



## 3

## ひとはくが社団法人環境情報科学センター賞特別賞を受賞

平成 18 年 5 月 17 日、ひとはくが社団法人環境情報科学センターから「第 6 回環境情報科学センター賞・特別賞」を受賞した。

選考理由は「本博物館では、従来の博物館における展示や知識伝達機能だけでなく、真の意味での『生涯学習』、即ち県民が自ら考え、自ら学習機会を創出していくという、県民参加型で自律的・持続的な学習環境を構築している。また、その活動水準は高く、県民の参加数も多く、社会に大きな影響力を継続的に及ぼしている。これらの事業の展開は、その膨大な実績の蓄積とあいまって、県民参加による生涯学習機関としての新たな博物館機能を付加させたものと高く評価できる」となっている。

平成 12 年に「博物館の新展開」計画を策定し、生涯学習とシンクタンクの事業を推進してきた 5 年間の活動が、高く評価されたものだ。

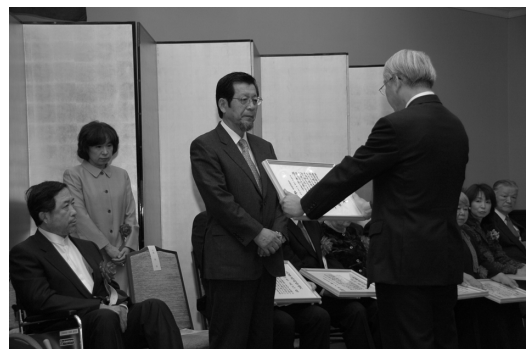


館を代表して賞状を受け取る中瀬副館長

## 4

## 中瀬副館長が平成 18 年度兵庫県科学賞を受賞

中瀬副館長が平成 18 年度兵庫県科学賞を受賞した。実践経験に基づきながら、緑地計画に生態学、社会学などを組み込んだ総合的な環境計画論を構築した業績を評価されての受賞である。主な業績として 3 つの流れがある。第 1 は兵庫県のビオトープ地図・プランにつながるもので、ドイツのビオトーププランの分析を基に、兵庫県独自の地域特性に配慮し、土地利用策定に役立つビオトーププランの概念を構築したことである。第 2 には阪神・淡路大震災直後からの都市公園避難地利用実態調査、県や市への提案、緑からの復興を支援する「阪神グリーンネット」などにコアメンバーとして関わったことを契機に、多様な緑を媒介としたコミュニティ形成のモデルを確立したことである。第 3 に、市民参画型の公園運営をめざし市民の継続的活動を可能にする支援方策やパークコーディネーターの職能論などについて研究し、県立有馬富士公園、(仮)県立丹波並木道中央公園などで実践している。以上のように、兵庫県において、自然環境の専門家としてさまざまな計画に関わり科学行政の推進に貢献したことが認められたといえる。

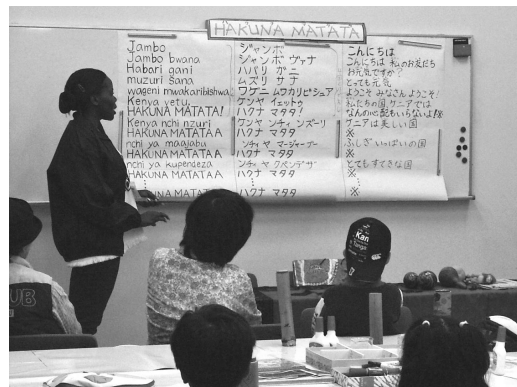


井戸兵庫県知事（右）より表彰をうける中瀬副館長（左）

## 5

ケニアからの研修生、フィービーさんが  
ひとはくで6ヶ月研修

平成18年8月1日から平成19年1月23日にかけての6ヶ月間、キスムミュージアム（ケニア）の博物館指導員であるフィービーさん（AWITI PHOGBG AWUOR）が、環境学習の手法を学ぶべく、ひとはくに研修員として来館された。主に、化石レプリカ、封入標本、昆虫標本、エコクッカーなど、ひとはく研究員が環境学習の現場で実際に用いている多様なツール、およびそれらを用いてのプログラム運営のノウハウを習得された。また、キャラバン事業やひとはくフェスティバル、フロアスタッフ業務、連携施設（有馬富士公園等）でのワーキングなどの、多様な博物館活動についても体験的に習得していただいた。「ケニアでは講義形式が中心で、子ども達も飽きてしまう。ここでは触ったり、音を感じたり、体験型の展示やプログラムも多く、参考になる」と、意欲的に研修に打ち込まれ、さらに研修終了時には「ここで得た環境学習の知識と技術をキスムにあった形で展開していきたい。そしてこのような環境学習を通じて、子ども達や若者達が環境保全に対して意欲的に取り組みだすことを期待したい」と、帰国後の目標についても語られた。彼女が将来の環境づくりを担う人材の育成に尽力されることを期待したい。



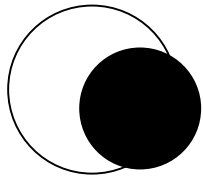
ひとはくフェスティバルで、子ども達にスワヒリ語を紹介するフィービーさん（左）

## 6

## コウノトリ常設展示をリニューアル！

兵庫県が進めているコウノトリの野生復帰計画も2005年と2006年に試験放鳥がなされ、現在の豊岡盆地は、あちこちにコウノトリの飛ぶ姿が見られるようになった。すでに地域にコウノトリの姿がなじんでいるといえる。もはや、コウノトリの野生復帰は将来の姿ではなく、現実の地域のあり方として、目に見える形になっているのである。そこで、ひとはくでは、人と自然が調和して生きる兵庫県のシンボルとして、コウノトリとその野生復帰を支える地域、をテーマとした新たな常設展示を作成した。このコーナーはコウノトリの剥製を中心にした一区画で、3階の中ほどにある。コウノトリの翼を広げた実物大写真の前で体重計に乗り、コウノトリがいかに大きいか、そしていかに軽いかを実感してもらえるハンズオン（フィートオン）の展示、コウノトリの羽根1枚がいかに大きいかを見てもらえる封入標本のハンズオン展示、コウノトリとはどんな鳥なのかをわかりやすく示した展示、野生復帰のためにどのような努力がなされているのか、そのためには地域の努力が不可欠であることを示す展示などが、段ボールの素材を使った斬新な手法で作成されている。ちなみに、本展示は、2005年に行なった企画展「コウノトリの野生復帰と自然再生」の素材を二次利用し、加工して作成したものである。



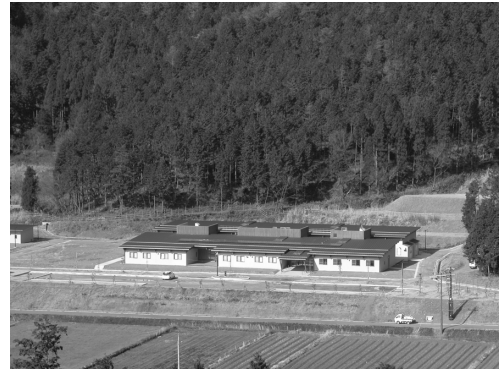


# 特別プロジェクト

## 1 ワイルドライフ・マネジメント プロジェクト

シカやイノシシによる農業被害、ツキノワグマの絶滅危惧と集落への出没、外来生物（ヌートリアやアライグマなど）の分布拡大など、人と野生動物の軋轢が、環境保全と被害対策の両面で深刻になっている。

地域における問題解決の能力を向上させ、野生動物と適切に共存していくために、兵庫県ではワイルドライフ・マネジメント（野生動物の保護と管理）を行なう中核機関として森林動物研究センターを平成 19 年 4 月丹波市青垣町沢野に開設する。人と自然の博物館は、農林水産部森林動物共生室と協力し、調査研究、現場対応や施策計画の支援などを行ないながら、センター設立をはじめとした兵庫県のワイルドライフ・マネジメントの体制づくりに参画してきた。



完成した森林動物研究センター

森林動物研究センターには、研究員 6 名（兵庫県立大学自然・環境科学研究所の教員が兼務）が新たに配置され、野生動物の適切な管理に必要な正確な状況把握、計画的な施策の立案、対策を講じる人への技術支援を行う。野生動物の適切な管理は県民・行政・研究者が一体となって取り組まなければならない課題である。新センターには、研究員に加えて森林動物専門員が配置され、関係機関や課題を抱える県民と協力して、研究成果の活用や対策の普及・実施に向けたコーディネートや技術支援を行なう。本プロジェクトでは、平成 17 年度より 2 年間にわたって森林動物専門員候補の研修も担当してきた。

野生動物の適切なマネジメントには、1) 被害を防除する被害管理、2) 野生動物の個体数を管理する個体数管理、3) 野生動物の適切な生息地を保全するための生息地管理、の 3 つの管理を、客観的な調査・研究の結果に基づき科学的・計画的に行なうことが必要であり、森林動物研究センターの創設にあたって、人と自然の博物館はこれらの具体的な構想と仕組みづくりに大きな役割を果たしてきた。

担当研究員：江崎保男 坂田宏志 横山真弓

### ワイルドライフ・マネジメントの体制づくりの検討への参画

- ・ワイルドライフ・マネジメント運営協議会
- ・森林動物研究センター設置の検討
- ・森林動物専門員制度創設に向けた検討

### 保護管理計画の策定・見直しなどへの支援

- ・外来生物防除指針、鳥獣保護事業計画、ニホンジカ保護管理計画、ツキノワグマ保護管理計画などの策定や見直し
- ・イノシシ、ニホンザル等の保護管理計画策定準備
- ・環境審議会など

### 上記の対応のための調査・研究活動

- ・センター設置に先行した調査、研究、資料収集（生息状況や森林環境などのモニタリング、生息密度や被害の将来予測）
- ・体制作りに向けた調査研究
- ・現場の実情を政策に結びつけるための社会学的調査
- ・クマ出没対応や個体数調整などの現場対応ならびに事例検証
- ・課題のある動物、移入種、希少種の分布調査

### 普及事業

- ・研修会、セミナー、シンポジウム等の実施
- ・展示やビデオソフトの作成

## 2 サバ・プロジェクト（人博・サバ大学共生生物学研究事業）

ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム協力は、同島の熱帯雨林の生物多様性調査を行い、そのデータに基づいて公園整備や野生動物保護、環境教育などを包括的に押し進めていこうとする5年間（2002年2月-2007年1月）のプロジェクトであり、環境保全にかかわる日本の国際協力のモデル事業になることが期待されているものである。マレーシア国立サバ大学とサバ州政府3省9部局が参画し、「研究教育」「公園管理」「生息域管理」「環境啓発」の4つのコンポーネントから構成されている（図参照）。本プログラムのなかで、人博が「人博・サバ大学共生生物学研究事業」として、特に中心的な役割を果たしているのは、サバ州における生物多様性・生態系保全のための研究・教育能力を確立することである。このために、1. サバ州での生物相調査の指導・実施、2. サバ大学熱帯生物学・保全研究所の自然史博物館機能確立（標本収集・保管能力、生物多様性情報管理能力、分類学の研究能力の確立、展示・普及活動の指導）、3. サバ州内の自然環境保全研究機関間ネットワーク構築（サバ大学、サバ州公園局キナバル博物館とサバ州森林局中央研究所の生物多様性情報のデータベース化とデータ共有のための組織構築）などに取り組んでいる。

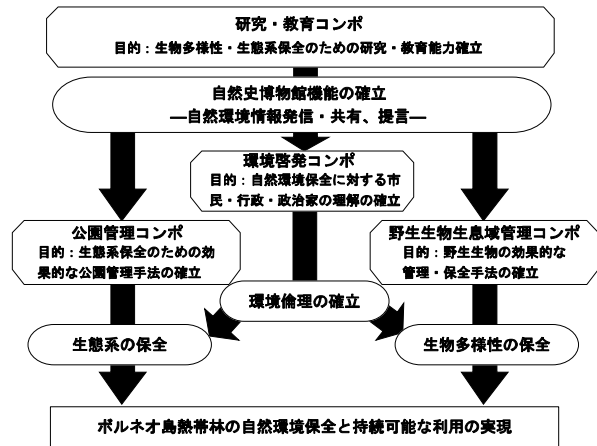


図 ボルネオ生物多様性・生態系保全プロジェクトの概念図

担当研究員：佐藤裕司，橋本佳明，石田弘明，高橋 晃，中西明德，秋山弘之，高野温子

表 人博・サバ大学共生生物学事業における2006年度の活動

2006年度の主な活動	活動内容	成果物など
ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラムの推進（2006年4月から2007年1月）	各種ワークショップ/セミナー、研修、出版、展示等の企画運営と、研究・教育活動への指導助言を行うと共に、プログラムの進行管理、評価、活動計画立案等を支援した。	ワークショップ実施（7回、29日）、セミナー実施（13回、13日）、国際会議実施（1回、3日）、出版物（3冊）、展示実施（2回）等
長期森林生態系研究のための拠点づくり（2006年4月から2007年1月）	長期的な森林生態系研究の拠点づくりを行うために、サバ州最大の自然公園であるクロッカー山脈に永久調査区を設置し、調査区内の生物や土壌等に関する調査を行った。さらに、調査区のモニタリングや維持管理手法、データ解析手法等についての研修およびセミナーを実施し、マニュアルを作成した。	ワークショップ実施（6回、25日）、セミナー実施（1回、2日）、永久調査区設置（3ヶ所）、マニュアル出版（2冊）
マルチメディアデータベースの構築（2006年4月から2007年1月）	サバ州における生物多様性情報のデータベース化とその公開に向けた支援を行った。	約2万点の生物標本情報のデータベース化、生物多様性情報活用のためのホームページの改良
サバ州カウンターパートの研修受け入れ（2006年6月から2006年9月）	サバ州環境副大臣Karim Bujang氏の環境保全行政に関する研修と、サバ大学熱帯生物学・保全研究所副所長Henry Bernard氏の野生動物保護・管理に関する研修を実施した。	カウンターパート2名への研修実施
マレーシア国立博物館における生物多様性展示の実施（2007年3月）	マレーシア国の首都にある国立博物館で、ボルネオ島の生物多様性に関する展示を行った。	展示用パネル、カエル拡大模型（2体）、展示用標本セットの製作・整備等
第9回ボルネオジャングル体験スクールの実施（2006年6月から2006年11月）	第9回目となるボルネオジャングル体験スクールのマレーシア・サバ州ダナムパレー自然保護区で実施した。県内の小学4年生から高校2年生までの男女合わせて18名がこれに参加した。	ジャングル体験スクール成果報告書の出版、体験発表会の実施等
JICAとの共催による国際協力公開シンポジウムの実施（2007年3月）	ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラムの活動成果を報告し、今後の活動計画を検討するための公開シンポジウムをJICAと共に東京で行った。	ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム成果報告書の作成

担当研究員：佐藤裕司，橋本佳明，石田弘明，高橋 晃，中西明德，秋山弘之，高野温子

## 3 GBIF・科学系博物館情報ネットワーク推進プロジェクト

### 【背景】

日本国内には、およそ 300 の自然史博物館があり、各館において貴重な標本が大量に収蔵されている。これらの標本は、地域の自然環境を後世に伝えるための重要な役割を担っており、生態系の保全や学術研究への活用が期待されている。しかし、目録やデータベースとして情報発信されている事例は限られており、自然科学分野の研究者ですら情報へのアクセスが難しい状況にある。この状況を改善する方策は、全国の博物館が収蔵する標本情報を一元的に統合し、インターネットを通じて複数の館や分野を横断的に検索するシステムを構築することである。

こうした試みは、すでに世界規模の生物多様性データベース整備 (Global Biodiversity Information Facilities: GBIF) として取り組まれている。しかし、GBIF の公開データは全て英語であること、データ登録や検索が煩雑で汎用性が低いこともあり、国内で参加する博物館はごく一部であった。この状況をうけて、昨年 (2005 年) より国立科学博物館および NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークが協力して、科学系博物館情報ネットワーク事業 (通称: S-net) を開始した。この事業では、単なる情報処理技術だけでなく、簡単なデータ整備の方法や標本整理に関する課題検討などを通じたワークショップを行い、ネット上だけのネットワークだけでなく、実務者による人的なネットワークを構築し、事業に対する理解と互いの技術力の向上を図った。その結果、初年度にて約 40 万件を、2006 年度にはさらに約 40 万件のデータが整備され、日本ではじめて大規模な生物多様性データベースを国内外に情報発信することができた。

### 【このプロジェクトの取り組み】

当館の GBIF・科学系博物館情報ネットワーク推進プロジェクトでは、NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークにおけるワーキンググループ幹事館として参画した。2006 年度の主な実施事業は、以下のとおりである。

- 1) データベース整備事業の公募および選定、データ取りまとめ (16 館 18 件: 約 20 万件のデータ整備)
- 2) 自然史博物館における情報発信に関する研究会の開催 (4 回/北九州市立いのちのたび博物館・国立科学博物館・伊丹市立産業・情報センター・大阪市立自然史博物館: のべ 250 名参加)、科学系博物館情報ネットワーク事業推進委員会への参画 (1 回/国立科学博物館)、作業部会 (2 回/東京大学・大阪市立自然史博物館)
- 3) データベース整備に関するツール開発 (RDB リスト、地名辞書、データ整形ツール、メーリングリスト)

特に、3) のツール開発においては、全国のレッドデータブック掲載種一覧を作成し、容易に非公開情報をチェックできるようにした。また、全国の自然地形や地名のデータベースを作成し、読み仮名や位置を検索できる「地名検索システム」を整備することで、データ整備の作業効率性を高めることに貢献した。

一方、全国規模でのデータ整備事業は順調に進んでいるが、当館における収蔵品データ発信については、課題が残されている。タイプ標本のリスト作成においては、最も資料数が多い昆虫分野の整備が進まず、タイプ標本目録を整備することが出来なかった。また、当館における収蔵品データベースの公開についても、データクリーニングが未完了のため公開にまで至っていない。次年度以降の課題として、中期目標として資料関連の指標を設けて、当館が収蔵する標本の情報を公開することが急務と言える。



国立科学博物館内に設置されたサイエンスミュージアムネットのホームページ (<http://science-net.kahaku.go.jp>)。このページから、各館の標本情報やホームページの横断検索ができる。

担当研究員: 江崎保男・高橋晃・秋山弘之・高野温子・鈴木武・三橋弘宗

## 4 ファーブル展ひょうごプロジェクト

「ファーブル昆虫記」刊行 100 年を記念し、国内自然系博物館 5 館（北海道大学総合博物館、国立科学博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、北九州市立自然史・歴史博物館と当館）とフランス国立自然史博物館との共同企画として「ファーブルにまなぶ」展を開催することになった。この展示はファーブルとその業績の紹介及び、「昆虫記」後の 100 年間になされた昆虫学ならびに関連分野の研究と、その応用技術の進展と現状を展示・解説することを目的として、2007 年夏、北海道大学総合博物館から始まり、各館を巡回する。

今年度当館からは、5 館の館長による実行委員をはじめ、企画運営委員会と展示ワーキングに担当者を送り、巡回展の共通展示部分を作るための協議・展示案作成・展示物調達などを行った。また 2008 年兵庫での開催に向けて、県内各地での自然の調査や保全への取り組みなど、兵庫のナチュラリストの活動を取り入れた展示案作成の準備と、関連機関との調整を行った。

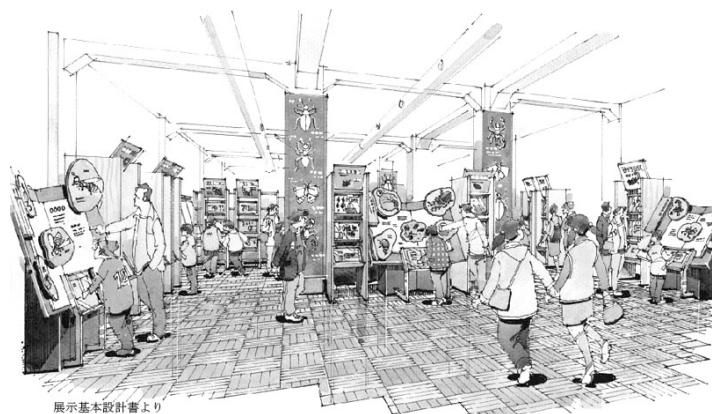
### <展示予定>

2007 年 7 月 1 日～9 月 17 日	北海道大学総合博物館
2007 年 10 月 6 日～12 月 2 日	国立科学博物館
2007 年 12 月 22 日～2008 年 2 月 11 日	北九州市立自然史・歴史博物館
2008 年 4 月 29 日～8 月 31 日	滋賀県立琵琶湖博物館
2008 年 9 月 20 日～11 月 30 日	兵庫県立人と自然の博物館

### <展示ストーリー概要>

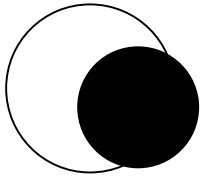
- 第 1 部 プロローグ・・・来館者とファーブルとの出会いの場
- 第 2 部 昆虫記の世界・・・「昆虫記」に描かれた実験の様子を楽しく紹介
- 第 3 部 ファーブルの時代と日本・・・ファーブルの生涯とともに、彼を受け入れた日本の特性を紹介
- 第 4 部 100 年後の昆虫記・・・「昆虫記」から 100 年たった、現在の昆虫学を概観
- 第 5 部 エピローグ・・・本展示のメッセージ性を高める「ふりかえり」の場

担当研究員：高橋晃・橋本佳明・中西明徳・大谷剛・沢田佳久・八木剛・田原直樹・江崎保男



展示基本設計書より





## 事業報告

人と自然の博物館では、その活動の内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成14年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標はいわば博物館の行動の指針となる大項目であり、これが全部で14項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として措置が設定されている。措置は、中期目標に関連する個別の具体的な項目について、その行動の方針と具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に即して平成18年度の博物館の活動内容と平成19年の事業の計画を整理したものであり、「この指標を支える項目」としてこれに関連する措置について同様の説明を加えたものである。

なお、平成19年度には平成14年度から平成18年度の活動成果をふまえ、社会のニーズに対応した新しい中期目標と措置を設ける予定である。

# 生涯学習の支援

## 担い手の養成 - 「学習」から「実践」までをサポートするソフトの提供

1

県民ニーズに即した段階的・連続的な学習プログラムを提供し、新規参加者を開拓するとともに、再参加を促進し、参加者数および参加者の層を拡大する

### 指標：学習プログラム参加者の総数

学習プログラム：館主催・共催のセミナー等普及教育を目的とする各種プログラム

### 指標：学習プログラム参加者のひろがり

セミナー受講者のひろがり：地域分布、年齢層（12歳以下、13歳から20歳未満、以降60代以上までの10歳刻みの7段階）

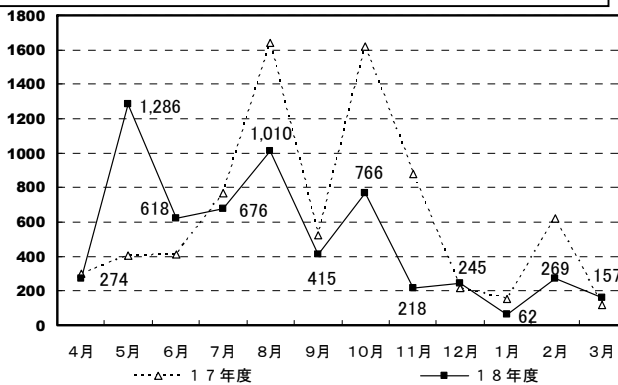
担当課室  
生涯学習  
事業室

### 学習プログラム参加者の総数

#### 達成度

目標 5,000人/年 に対して、**119.9% (5,996人)**

■セミナー参加者数 **4,432**  
■キャラバンセミナー参加者数 **1,564**



セミナー受講者数

### 学習プログラム参加者のひろがり

#### 達成度

目標 全地区・全年齢層の獲得に対して **未達成**  
(ただし、上記目標はH18年度に達成を目指すものである)

年代	神戸	阪神南	阪神北	東播磨	中播磨	西播磨	北播磨	但馬	丹波	淡路	県外	齢別計
10	401	189	802	63	52	14	52	30	37	17	34	1691
20	116	37	72	49	9	5	19	12	7	23	0	349
30	248	78	229	34	28	6	16	6	22	18	1	686
40	359	143	357	51	48	10	26	12	15	12	3	1036
50	301	208	344	102	30	29	52	13	11	13	1	1104
60	179	280	520	133	24	16	13	13	26	7	3	1214
70	94	24	164	53	0	1	5	5	4	0	0	350
不明	346	149	601	132	63	44	45	27	52	16	1	1476
総計	2044	1108	3089	617	254	125	228	118	174	106	43	7906

### 解説

#### 学習プログラム参加者の総数

##### ①H18年度の取り組み

地域研究員の養成を目指し、体系だったプログラムの構築に努めた。

##### ②H18年度の到達状況の自己評価

地域研究員らの発表会「共生のひろば」が前年に引き続き盛況となるなど、担い手の育成は着実に実を結びつつある。

##### ③H19年度の取り組みの予定

担い手育成型のセミナーを充実させるほか、県下5地域で3年間固定型の担い手育成を開始し、より確実にひとはくのパートナーを増やす。

#### 学習プログラム参加者のひろがり

##### ①H18年度の取り組み

中播磨地域や淡路地域だけでなく、全地域において高齢者も参加できる学習プログラムの充実を図った。

##### ②H18年度の到達状況の自己評価

前年に引き続き、ほぼ全県全世代の参加者を得た。

##### ③H19年度の取り組みの予定

気軽に参加できるオープンセミナーを増強し、特に幼児、低学年に学習のきっかけを提供し、年齢層の拡大を図る。また、県下各地で担い手育成事業を開始する。

## この指標を支える項目

### ■セミナー参加へのPRを促進 -セミナー受講者数・セミナー新規受講者数

H18の取り組み	●地域研究員養成のための体系だったセミナープログラムを整備した。
自己評価	●セミナー受講者数は去年に引き続き5000人を上回った。但馬など受講者数の少ない地域もあるが、ひとはくの生涯学習支援活動は、県民に広く知れ渡ってきた。
H19の予定	●複数回セットの担い手育成型セミナーを増設。また無関心層を掘り起こす来館者向けオープンセミナー、来館団体向け特注セミナーを増設。

### ■講師派遣の拡大 -他団体主催の講演会への研究員の派遣回数（講演会数）・講演会聴講者数

H18の取り組み	●連携事業としての位置づけ、受講生が博物館に来館するための動機づけなど、館事業との繋がりを意識し講義を、館員全体が意識するよう啓発する。
自己評価	●302件、20927名の受講者実績をあげ、目的を達成した。
H19の予定	●博物館主催セミナー・キャラバンセミナーとのバランスをとりながら進める。

### ■博物館実習の受け入れ -博物館実習受入人数

H18の取り組み	●9大学、9名の学生が受講した。実習初日に博物館の全体像を掴むためのオリエンテーションを行った。
自己評価	●受講者からは、内容について（アンケートの結果で）おおむね「よかった」との評価を受けている。なお受講者からは「やりがいがあった」「もう少し長い期間実習をしたい」との声もあった。
H19の予定	●実習を行う前の週に、事務連絡及び館長による講義を受講することで、実習生の意識を高めて、初日からスムーズに実習が行えるよう日程を工夫する必要がある。

### ■セミナー受講者の満足度の向上 -アンケートにおける満足度評価点数・セミナー再受講率

H18の取り組み	●セミナー再受講率の高い顧客に対してヒアリング調査を実施するなどの、質的評価を得るための調査を実施した。
自己評価	●アンケートによる調査はプラスの評価に偏りがちである。
H19の予定	●「苦情」を拾いあげ、すぐに解決するシステムを構築する。

### ■若手研究者の育成 -外部からの研究希望者受け入れ数

H18の取り組み	●外部からの希望にそって、6名の受け入れを行った。また、兵庫県立大学の大学院生の受け入れ態勢を整えた。
自己評価	●大学院生の受け入れができるようになったことは大きな前進である。
H19の予定	●大学院生8名を4月に受け入れるので、大学院と連動した生涯学習活動を行っていく。

### ■「科学する心」を育むプログラムの整備 -中高生のセミナー受講人数

H18の取り組み	●学校団体の来館促進のため、来館団体向けの特注セミナー（ワンポイントセミナーを含む）を実施した。また、高校生向けに「1日体験オープンミュージアム」などのプログラムを用意した。
自己評価	●学校団体の来館者増に貢献できた。
H19の予定	●「自然環境調査入門」や「人と自然の共生を考える」などの高校連携セミナーなどをより充実させるだけでなく、中学生向けのプログラムについても研究開発を行う。

# 生涯学習の支援

## 担い手の養成 - 「学習」から「実践」までをサポートするソフトの提供

# 2

県下各地域において、県民と館とが参画と協働によって実施する参画・協働型プログラムを積極的に企画し、学びの実践を支援する

**指標：県民・団体・NPO等との連携による参画・協働型プログラム数**

参画・協働型プログラム：県民・団体・NPO等との連携によって実施するプログラム

担当課室  
シンクタンク  
事業室

### 県民・団体・NPO等との連携による 参加・協働型プログラム数

#### 達成度

目標 30件/年に対して **243%** (73件)

#### 内訳

キャラバン関連事業	<b>34</b>
県民、NPO等との連携事業 (キャラバン、アウトリーチプログラムを除く)	<b>39</b>

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

昨年度と同様、県下10地域でキャラバン事業を実施した。また、キャラバン等で連携した活動団体の発表の場として「共生のひろば」を開催した。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

キャラバン関連事業が普及したこともあり、昨年度より微増した。

#### ③H19年度の取り組みの予定

連携グループ等が主催するセミナーの回数や多様性を高めることが必要。

### この指標を支える項目

#### ■県民参画プログラムの拡大 - 共催事業数・活動人数

H18の取り組み	●昨年度に引き続き、キャラバン事業を10地域21ヶ所で開催した。そのうち2ヶ所地域研究員養成プログラムを実施した。
自己評価	●連携団体は昨年度の102件から29件減の73件となったが、質の充実化を図った
H19の予定	●地域研究員養成事業との連動をすすめ、人材育成などの質的な充実をはかる。

#### ■県民参画プログラムの拡大 - フェスティバルへの参画団体数・キャラバン事業への参画団体数

H18の取り組み	●昨年度に引き続き、ひとはくフェスティバル、キャラバン事業、共催事業など、多数の県民参画型プログラムを実施した。特に、活動発表の場である「共生のひろば」を開催し、市民活動で培われた貴重な知恵と情報を多くの方で共有する機会を創出した。
自己評価	●共生のひろばにより、発表レベルの向上や団体間の交流もみられ、活動の相乗効果を生むことができた。
H19の予定	●キャラバン事業などと地域研究員の育成をマッチングさせたプログラム展開が必要となる。達成目標の一つとして、共生のひろばへの参画を促し、個々の活動を深化させるよう支援する。

#### ■人と自然の会をはじめとするNPO等との連携事業の拡大

-館主催(共催)の連携・協力事業数・ボランティア登録者数・ボランティア活動のべ人数

H18の取り組み	●関西野生動物問題研究会などを始めとする10件の連携グループがこれまでになかった人形劇のような活動を実施したことで、高度で学術的なものでなく、無関心層を引き付ける機会となった。
自己評価	●博物館を活動の場として、調査研究だけでなく普及教育事業など活動の裾野が広がった。
H19の予定	●連携グループと博物館との連携のレベルが多様化してきていることから、それぞれのレベルでのよりよい連携のあり方について模索する。

# 生涯学習の支援

## 県民ニーズに応えた学習の場の提供

### －魅力ある空間づくり・実践フィールドの提供

# 3

展示の質の向上、レファレンスの充実等によって、魅力ある空間づくりの観点から館の機能を充実させる

#### 指標名： ビジター数

一年間の博物館の利用者総数、本館への入館者数および、主催および共催事業への参加者数で表される。

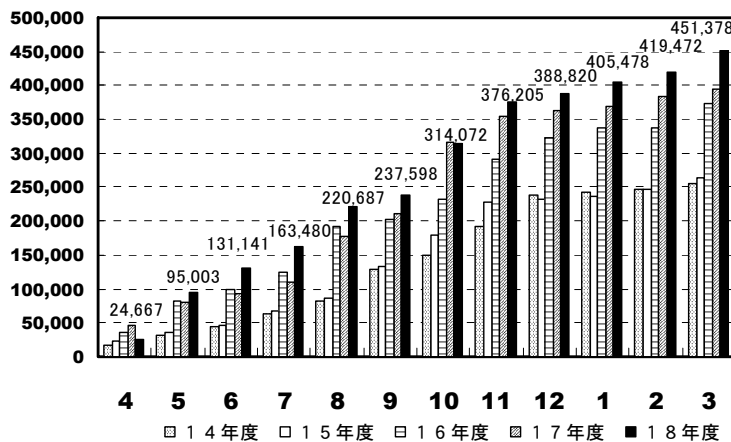
担当課室  
生涯学習課  
スクールパートナー  
推進室

### ビジター数

#### 達成度

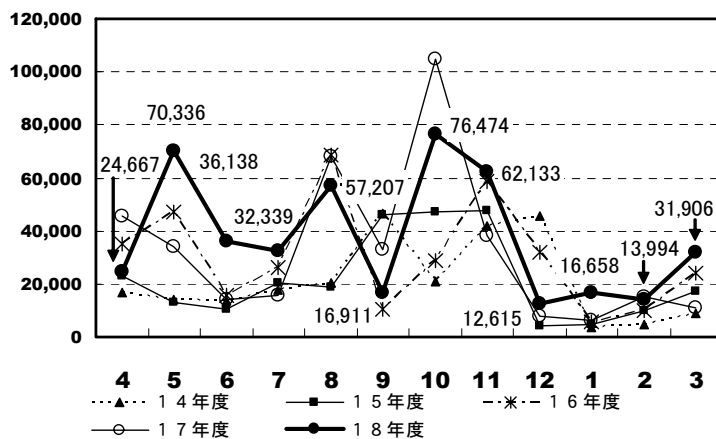
目標 250,000人/年 に対して

**180.6% (451,378人)**



#### 累積ビジター数

内訳		学校団体	
本館	206,605	12.2%	
キャラバン	155,466	9.4%	
共催事業	89,307	78.4%	



#### 月別ビジター数

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

子ども向けのセミナーやイベントの充実を図り、来館者の増加に力を入れた。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

館内でのイベント等を充実させた結果、来館者増につなげることができた。さらに、キャラバン事業、共催事業の効果もあってビジター数が大幅に増加した。

#### ③H19年度の取り組みの予定

館内のお客様へのサービスを向上させ、わかりやすい、親しみやすい博物館となるような取り組みを充実させる。来館者が満足のいく様々なイベント等を企画する。

## この指標を支える項目

### ■ イベントの開催と充実 -フェスティバルへの参加者数

- H18の取り組み ●例年通り広域の博物館、公園、市民グループの参画を得るとともに新たに近郊6校による吹奏楽ステージ、日頃の博物館事業紹介プログラムなどを実施した。近隣公共施設・商業施設等とも連携し地域の祭りの事務局として集客を図った。
- 自己評価 ●充実したプログラム内容により、目標の2万人を上回る参加者を得た。
- H19の予定 ●集客とともに参画していただく連携施設・団体との連携を重視し、企画内容、実施体制を工夫する。

### ■ イベントの開催と充実 -博物館の日への参加者数

- H18の取り組み ●サイエンスショーをはくぶつかんの日に開催し、参加者数増を目指した。
- 自己評価 ●サイエンスショーの参加者や恐竜化石見学者により、参加者数が増加した。
- H19の予定 ●はくぶつかんの日とともに、日祝と夏休み期間中の土日のオープンセミナーを充実させ、来館者増を図る。

### ■ イベントの開催と充実 -イベント参加者数の確認

- H18の取り組み ●イベント開催日を増やすのではなく、効果的なイベント企画を行って参加者数の増加に努めた。
- 自己評価 ●ファミリーで参加できるイベントを同日に集中開催したため、複数のイベントへの参加を促せた。
- H19の予定 ●研究員によるオープンセミナーを充実させ、イベント参加者数の増加を目指す。

### ■ イベントの開催と充実 -サイエンスショー

- H18の取り組み ●昨年度に続き、年3回(11月、12月、2月)実施して、より多くの子どもたちに参加機会を提供した。
- 自己評価 ●各回とも大勢の子どもたちが参加した。小学生の参加は多いが、中高生の参加を今後増加させる方策を検討したい。
- H19の予定 ●年3回の実施を継続するが、実施日は近隣の学校行事等を考慮して参加しやすい日に設定する。

### ■ 一般団体の利用の拡大 -来館一般団体数

- H18の取り組み ●県内各旅行社へのパンフレットの送付など、団体誘致に努めた。
- 自己評価 ●471団体にご利用いただいた。県内が減り県外が増えた。
- H19の予定 ●わかりやすい博物館となるよう努め、各旅行社や各団体への広報を強化する。

### ■ 学校団体の利用の拡大 -来館学校数

- H18の取り組み ●研究員等によるセミナーを充実させることにより、学校団体へのサービスを向上させた。
- 自己評価 ●学校来館団体数は300校の大台に乗せた。
- H19の予定 ●来館学校に対するセミナーをさらに充実させて、より満足のいく来館にするよう努める。

### ■ 学校団体の利用の拡大 -継続来館学校数

- H18の取り組み ●81校が昨年度に引き続き来館した。
- 自己評価 ●学校団体への研究員等によるセミナーが充実してきた。
- H19の予定 ●特注セミナーなど団体対応をよりきめ細かく行い、今後も継続来館学校数を増やすよう取り組む。

### ■ 学校団体の利用の拡大 -ミュージアムティーチャーによる展示案内・指導回数

- H18の取り組み ●館内見学時の支援よりも、学校団体向けセミナーに力点を置いた。
- 自己評価 ●セミナー開催が129回。今後、開催数を増やす必要がある。
- H19の予定 ●より魅力あるセミナーを企画して、指導回数の拡大を図る。また、館内での見学時の支援も強化する。

### ■ 学校団体の利用の拡大 -教職員セミナー開催数

- H18の取り組み ●8月17日から23日まで、5日間に昨年度より5講座多い23講座を開催した。
- 自己評価 ●のべ562名の受講者があった。小学校の教員の参加が増え、周知されてきたことを示している。
- H19の予定 ●6日間に25講座と、日数、講座数ともに増やして、幅広いニーズに対応して実施する。

## ■児童生徒の来館促進 -ココロンカードの利用者数

H18の取り組み	●ココロンカードの利用者増を図るため、放課後のイベントを増やし、近隣小中学校への広報も実施した。
自己評価	●ココロンカードの利用者数は、前年比7.3%（2602人）増で、取り組みの効果が現れた。
H19の予定	●子どもたちがいつ来館しても楽しく参加できるイベントを今後とも充実させていく。

## ■児童生徒の来館促進 -ミュージアムティーチャーのセミナー開催数

H18の取り組み	●7講座9回のミュージアムティーチャーによるセミナー（ミュージアムスクール）を開催した。
自己評価	●定着したメニューになりつつある。
H19の予定	●一般セミナーとしてだけでなく、オープンセミナーの開催数を増やす。

## ■児童生徒の来館促進 -夏休み理科相談室への参加者数

H18の取り組み	●8月24日から27日の4日間で119件の相談を受けた。前年比35件増であった。
自己評価	●夏休み後半だけの開催であるため、どうしても質問・同定だけに終わる傾向が見られる。
H19の予定	●8月の前半と後半に各1日設けることで、単なる質問会ではなく、事前・事後指導につながる取組に発展させる。

## ■児童生徒の来館促進 -児童への資料等の活用件数

H18の取り組み	●ホームページからダウンロードできる資料・教材を充実させた。
自己評価	●活用しやすいミュージアムボックスの開発と広報が必要である。
H19の予定	●新しいミュージアムボックスの開発に力を入れる。

## ■常設展・企画展の質・面白さの向上 -企画展を目的とした来館者の比率・来館者の満足度

H18の取り組み	●古生代化石、外来生物、昆虫、景観写真と多様なテーマを設定し、とくに昆虫分野では子どもを意識した企画展を開催した。
自己評価	●企画展観覧者はおおむね来館者数の50%以上を占めた。
H19の予定	●丹波の恐竜化石を活かした展示の開催や、多様なテーマの企画展を実施する。

## ■展示空間の活用-企画展、貸会場、臨時展示の回数・常設展示の改善件数

H18の取り組み	●10ヶ所以上の常設展の補修を進め良い展示環境を維持するとともに企画展4回、ミニ企画展17回、資料・トピックス展示2回を開催し展示空間を活用した。
自己評価	●企画展等の開催数は年次目標を達成できた。常設展の故障が多く補修に努めたが、耐用年数をこえる展示物が主体で、今後の維持に問題がある。
H19の予定	●資料・トピックス展示を研究グループ単位で各月1回、年12回開催する。

## ■ホスピタリティの向上

H18の取り組み	●自然や環境を題材にした遊びを通じて、来館者との交流をより深めた。
自己評価	●フロアスタッフを中心としてミニ企画展やお正月イベントなどを意欲的に展開した。
H19の予定	●団体対応をより円滑に進めるための改善策をさぐる。

## ■レファレンスルーム・情報センターの充実-レファレンスルーム利用者数・情報施設の利用度

H18の取り組み	●サロンカウンターでの質問対応など、サロンの利用促進に努めた。
自己評価	●カウンターでの対応人数は2月現在で昨年度実績より約4000人増加した。
H19の予定	●丹波市での恐竜化石の発見にともない、関連する図書や資料を増やす。

# 生涯学習の支援

## 県民ニーズに応えた学習の場の提供

—魅力ある空間づくり・実践フィールドの提供

# 4

他施設との連携等により、県下各地に館のサービス提供の場を設け、県民の学習や実践の機会を拡大する

### 指標名： 連携施設数

連携施設：プログラムの共催、協力等連携して事業を実施した施設



## 連携施設数

### 達成度

目標 のべ10施設(18年度まで) ※下記は今年度の連携  
 に対して **14年度ですでに達成** 施設一覧(60件)

たつの市教育委員会	尼崎市立浜田小学校
芦屋市	日本昆虫学会近畿支部
芦屋市教育委員会	日本鱗翅学会近畿支部
芦屋市市民センター	姫路市立余部小学校
加古川市立神吉中学校	姫路市立林田小学校 兵庫県土整備部
加西市生活環境部	兵庫県立大附属高校
県立神戸生活創造センター	兵庫県立但馬長寿の郷
福原市昆虫館	豊岡市立コウノトリ文化館
県立六甲山自然保護センター	豊岡市竹野地区公民館
県立舞子高等学校	豊橋市自然史博物館
高砂市教育委員会	名古屋大学博物館
国立民族学博物館	兵庫県立神戸学習プラザ
自然体験教育研究所	明石市立文化博物館
宍粟防災センター	兵庫県西播磨県民局環境課
洲本市立淡路文化史料館	有馬富士公園
神戸三田新阪急ホテル	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校
神戸市立王子動物園	養父市立養父公民館
神戸市立広陵中学校	豊岡市立但馬国府・国分寺館
神戸市立道場小学校	頌栄保育園
神戸市立有野児童館	北播磨田園空間博物館
西宮市立名塩小学校	北摂コミュニティ開発センター
浅見化石会館	三田市立有馬富士自然学習センター
猪名川町生涯学習センター	淡路ワールドパークONOKORO
大阪市立自然史博物館	姫路市伊勢自然の里・環境学習センター
鳥取市歴史博物館	兵庫六甲農業協同組合三田営農総合センター
徳島県立博物館	兵庫県阪神北県民局土整備部三田土木事務所
独立行政法人国際協力機構	財団法人兵庫県園芸・公園協会一庫公園管理事務所
南あわじ市	
二戸市立二戸歴史民俗資料館	
佐用町	

## 解説

### ①H18年度の取り組み

昨年度と同様、キャラバン事業を軸とした他施設との連携に努めた。

### ②H18年度の到達状況の自己評価

H17年度は75件であったが、本年度は他事業への労力分配を意識して、努力目標を低く設定したにも関わらず、昨年に近い60件であり、連携体制を維持することができた。

### ③H19年度の取り組み

地域研究員などの人材養成事業を中心として連携プログラムの充実化をはかり、裾野が広い活動を展開する。

## この指標を支える項目

### ■学習の場となる連携施設・会場の開拓

—館外会場件数・イベント集客数・展示出展回数・有馬富士公園等でのプログラム数・有馬富士公園等でのプログラム参加者数・ガイド作成など実践フィールドの質の向上につながる措置の件数・学習の場となる連携施設数・研究員の派遣施設・会場数

H18の取り組み	●昨年と同様の施設等での継続的な連携事業を発展させた。
自己評価	●連携施設数を維持させつつ、より多様なプログラムを展開し、固定客を確保できた。
H19の予定	●次年度はさらに重点的なキャラバンを5箇所、広報的なものを5箇所実施する予定。



# II 自然・環境シンクタンク機能の充実

## 自然環境情報の一元管理 -ひととはくに来ればすべてがわかる

1

収蔵資料等の電子化を進めるとともに、家庭、職場、学校等館外であっても必要な情報をネットワークで活用できる情報システムの整備を図り、電子化された情報の効果的な活用を促進する

### 指標：電子情報の利活用件数

電子情報の利活用件数：収蔵情報システム、自然・環境情報システム、館HP資料関係ページへのアクセス数

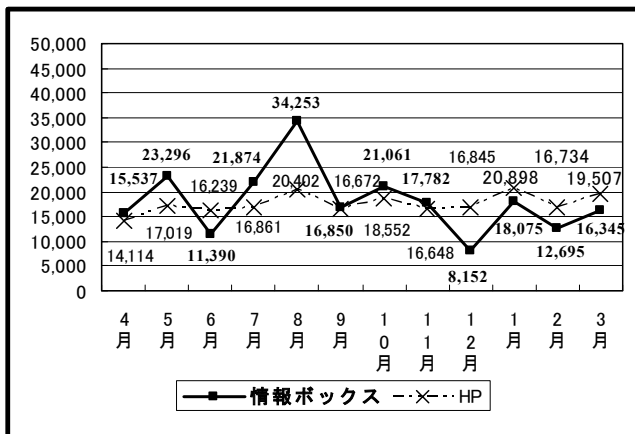
担当課室  
シンクタンク  
事業室

### 電子情報の利活用件数

#### 達成度

目標 70,000 アクセス/年に対して

**611.1% (427,801件)**



内訳 情報ボックス **217,310**  
館HPアクセス **210,491**

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

館の展示解説やイベント情報等の基本情報の提供は、来館者へは館内情報端末、一般の県民へは館ホームページで行っている。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

ホームページを利用したセミナー情報の提供に加え、ホームページからセミナーへの参加申し込み機能を追加している。ホームページからの申し込み実績は、セミナー参加者の4割程度と微増している。

#### ③H19年度の取り組み予定

ホームページを利用した機能付加の一つとして、リアルタイムで新しい情報を発信するためブログ機能やセミナー倶楽部会員のWEB登録システムを追加する。

### この指標を支える項目

#### ■電子登録数の拡大 -資料の電子情報化件数

- |          |   |
|----------|---|
| H18の取り組み | ●国立科学博物館、GBIF(地球規模生物多様性情報機構)との連携事業により、収蔵品資料の情報公開を進めた。 |
| 自己評価     | ●国立科学博物館およびGBIFを通じ博物館収蔵資料の電子情報1万2千点を公開した。             |
| H19の予定   | ●収蔵品データベースやマルチメディアデータベース等の館内の電子情報化をさらに進める。            |

#### ■館内端末の利活用 -情報ボックスの利活用件数・情報センターの利活用

- |          |   |
|----------|---|
| H18の取り組み | ●情報ボックスで視聴できる博物館制作のビデオを追加するとともに図書を充実させた。  |
| 自己評価     | ●丹波の化石に関するページを追加した。新着図書を319件追加した。         |
| H19の予定   | ●端末のコンテンツに、わかりやすく魅力的なものを追加する。次期システムを検討する。 |

#### ■自然環境情報システムの整備と質の向上 -自然環境情報システムの利用数・配布件数等

- |          |  |
|----------|--|
| H18の取り組み | ●自然環境に関する調査委託を地域の団体と協力して実施する。自然環境モノグラフを発行する。 |
| 自己評価     | ●希少動植物等を中心に8件の調査成果をまとめた。大型野生動物に関する調査成果を発刊した。 |
| H19の予定   | ●今後もさらに調査結果をとりまとめた冊子の製作等を行う。                 |

# II 自然・環境シンクタンク機能の充実

## 自然環境情報の一元管理 —ひととくに来ればすべてがわかる

2

収蔵資料及び関連情報を広く一般に提供するとともに、より専門的な学習、調査研究に資するため、閲覧、貸出等収蔵資料の直接的な利活用を促進する

### 指標：資料利用者総数

資料利用者：収蔵庫利用者、レファレンスルーム等館内資料閲覧場所における資料利用者、及び外部への貸し出し等館外での資料利用者を合わせたもの

担当課室  
シンクタンク  
事業室

### 資料利用者総数

#### 達成度

目標 1,000 人/年 に対して

**110.7% (1,107人)**

①内は調査	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	累計
<収蔵>													
地学系	21(2)	5(0)	6(2)	20(0)	18(0)	7(0)	2(0)	16(0)	12(3)	2(0)	23(8)	7(0)	154(15)
液浸	0(0)	0(0)	6(0)	0(0)	7(2)	4(0)	0(0)	9(0)	0(0)	0(0)	4(4)	2(2)	38(8)
生物系	40(9)	14(5)	14(9)	30(8)	33(11)	49(7)	29(10)	11(1)	34(1)	38(31)	75(1)	13(5)	473(98)
環境系	21(0)	0(0)	0(0)	4(0)	3(0)	0(0)	10(0)	1(0)	9(0)	0(0)	0(0)	0(0)	48(0)
小計	82(11)	19(0)	26(6)	54(4)	61(4)	60(7)	41(10)	37(1)	55(4)	40(31)	102(13)	22(7)	690(98)
ジーン	78(0)	104(0)	41(0)	9(0)	37(0)	78(0)	32(0)	8(0)	52(0)	0(0)	0(0)	7(0)	446(0)
月別合計	160(11)	123(0)	67(6)	63(4)	98(4)	138(7)	73(10)	45(1)	107(4)	40(31)	102(13)	29(7)	1136(98)

収蔵庫など見学者数

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

収蔵品データベースを活用した研究目的での資料の貸し出し、キャラバン事業での展示に力を入れた。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

年次目標に対して達成度が110.7%であった。

#### ③H19年度の取り組み

資料の活用方針の検討が必要である。タイプ標本の再確認と情報発信が急務である。

### この指標を支える項目

#### ■収蔵資料に関する情報の提供 —一般県民向け出版物またはCDの発行の有無

- |          |   |
|----------|---|
| H18の取り組み | ● 藤本コレクションを受け入れることが出来た。野生動物に関する自然環境モノグラフ第三号を発刊した。 |
| 自己評価     | ● 野生動物関連の膨大な自然環境情報を発信することができた。                    |
| H19の予定   | ● タイプ標本の再確認と外部へのデータ発信が不可欠                         |

#### ■収蔵資料の積極的公開 —収蔵庫利用者のべ人数

- |          |                                       |
|----------|---------------------------------------|
| H18の取り組み | ● 資料の貸し出し、収蔵庫の案内などを行った。               |
| 自己評価     | ● 資料利用者総数が昨年度に比べ倍増し、多岐にわたる研究活動に活用された。 |
| H19の予定   | ● 資料活用をさらに進めることを検討する。                 |

#### ■ミュージアムボックスの製作 —ミュージアムボックスの検討状況

- |          |   |
|----------|---|
| H18の取り組み | ● 資料の貸し出しについては、計11件(230点)であった。            |
| 自己評価     | ● 資料貸し出しを促進する仕組みが必要。新規の環境学習グッズの開発が不可欠である。 |
| H19の予定   | ● ミュージアムグッズの整理・開発を行い、ミュージアムボックスの充実を図る。    |

#### ■ジーンファームの積極的公開 —ジーンファーム見学者数・絶滅危惧植物里親の登録者

- |          |  |
|----------|--|
| H18の取り組み | ● 博物館の日にジーンファームツアーを開催し、ジーンファーム内部の公開に努めるとともに、ジーンファームの紹介映像をひととくサロンで上映した。 |
| 自己評価     | ● ジーンファームでの取り組みをより一般来館者に知ってもらえることができた。                                 |
| H19の予定   | ● 引き続き、ジーンファームの映像をひととくサロンで上映する。  |

## II 自然・環境シンクタンク機能の充実

### 総合的なシンクタンク事業 -ともに考えるコミュニティシンクタンク

# 3

地域が抱える人と自然の共生に関する多様な課題に対し、専門的な立場からのアドバイス、情報提供を行う

指標：館員が関与したプロジェクト数

担当課室  
シンクタンク  
事業室

#### 館員が関与したプロジェクト数

##### 達成度

目標 300 件/年 に対して **137.7% (413件)**

内訳	
受託研究件数	20 (うち企業等からの受託研究 2)
各種委員会参画数	314
共催・協力事業などの相手先数	42
植物、種子、ノウハウ等の提供件数	32
企業等のプロジェクトへの 指導助言件数	5

#### 解説

##### ①H18年度の取り組み

ワイルドライフマネジメントセンターの設立準備室を受け持った。

##### ②H18年度の到達状況の自己評価

昨年と同様、数多くの県政課題に関するプロジェクトに参画した。

##### ③H19年度の取り組み

引き続き、委員会参画、受託研究等のプロジェクトに積極的に関わるよう館員に促していく。

#### この指標を支える項目

#### ■行政課題に関する研究の受入 -受託研究件数

H18の取り組み	●受託研究件数が昨年度の17件からさらに24件と増加した。
自己評価	●行政の依頼に対し、断ることなく十分に対応できた。受託額が大幅に増加した。
H19の予定	●キャラバン事業と連動させて、委託調査を受け入れていくなどの工夫を行う。

#### ■行政に対する専門知識・ノウハウの提供 -各種委員会参画数・分野別広がり

H18の取り組み	●行政機関の委員会委員、アドバイザー等、依頼機関の事業推進、政策立案等の支援を実施した。
自己評価	●依頼に十分答えることができ、専門知識やノウハウを提供できた。
H19の予定	●引き続き依頼があれば優先的に参画し、専門知識を活かして貢献していく。

#### ■企業・NPO等への専門知識・ノウハウの提供 -企業等からの受託研究、企業等のプロジェクト

H18の取り組み	●㈱リコー等の企業からの受託研究を実施し、また合計5件の指導・助言を行った。
自己評価	●昨年度の指導・助言件数23件と同等のレベルを維持できた。
H19の予定	●引き続き、企業等からの受託研究や生涯学習支援事業を2件以上実施する。

#### ■シンクタンク事業における外部機関との連携の拡大 -共催・協力事業等の相手先数、貸出制度有無

H18の取り組み	●特にキャラバン事業において、外部機関と連携を心がけて実施した。
自己評価	●共催・協力事業等の相手先数を維持し、質的な深化を行う事ができた。
H19の予定	●関心層を担い手へと人材育成する仕掛けを検討し、実践する必要がある。

#### ■ジーンファームの利活用 -植物・種子・ノウハウ等の提供件数

H18の取り組み	●貴重植物の育成・増殖・受入だけでなく、県の事業に対する支援を行うなど、ジーンファームを活用したミチゲーションの可能性を検討した。
自己評価	●ジーンファームに対する多様なニーズに対応できた。
H19の予定	●さらなるジーンファームの活用を検討していきたい。

## II 自然・環境シンクタンク機能の充実

### 総合的なシンクタンク事業 —ともに考えるコミュニティシンクタンク

# 4

県民・NPO・団体等と共に人と自然の共生に資する活動を推進するために、わからないことは博物館に聞く受皿となる仕組みの構築を検討するとともに、その一環として相談しやすい環境・システムを整備する

**指標：わからないことは博物館に聞く受け皿となる仕組みの有無**

**指標：年間相談件数**  
博物館への年間の質問件数

担当課室  
シンクタンク  
事業室

#### わからないことは博物館に聞く仕組みの有無

##### ●4件の新しい仕組みを整備した

- ・よく受ける質問や学習素材をブログにまとめ、わからないことを聞くことができる体制ができた。
- ・館からの情報を積極的に受け取れる体制として、セミナー倶楽部会員向けのメールマガジンを整備した。
- ・地域研究員制度を整えて、館員とのコラボレーションによる学習の推進体制を整備した
- ・高度な学習を目指す方のために、大学院を設置した

#### 年間相談件数

##### 達成度

目標 300件/年 に対して **925.0% (2,775件)**

内訳

電話・メールによる相談件数

**1,884**

相談来館者件数

**891**

#### 解説

##### ①H18年度の取り組み

電話や e-mail 等による質問や依頼等に対し、それぞれ専門に近い館員が対応した。

##### ②H18年度の到達状況の自己評価

相談件数の算定方法が課題であったが、数の算定よりも、内容の還元に重点をおいた。

##### ③H19年度の取り組み

相談を受けた内容を、できるだけブログ等を通じて返す体制が必要

#### この指標を支える項目

##### ■相談へのきめ細やかな対応

-県民等からの電話・メールによる相談件数・行政関連での相談来館者数

H18の取り組み

●電話、e-mail 等による質問や依頼に対し、それぞれ専門の近い館員が対応した。質問および回答の内容はイントラネット上の掲示板により館員間で共有するようにした。

自己評価

●2000件を超える相談に応えることができ、十分に目標を達成した。

H19の予定

●相談内容を要約して、知識の共有化が図れるよう情報発信する必要がある。

# III 研究・資料

## 世界～地域の研究・資料を全事業にフィードバックし、 効率化・最適化を図る

# 1

兵庫県の人と自然に関する研究の中核拠点としての水準を保ちつつ、博物館として常に魅力的なテーマの研究を遂行する

### 指標：学術論文著書数

論文は学会等審査付き、あるいはそれに準じるもの

担当課室  
研究開発  
会議

### 学術論文著書数

#### 達成度

目標 40 本/年 に対して

**137.5% (55本)**

### 解説

#### ①H18 年度の取り組み

研究員 1 年 1 本の学術論文作成を目標に掲げ、月例報告会で学術論文著書の累積実数を示し、各研究員・各研究部の現状把握を図り、目標値の達成を目指した。

#### ②H18 年度の到達状況の自己評価

目標値 40 本に対し 55 本の学術論文著書数があり、達成率 137.5%であった。個人や研究部ごとの実績の評価体制をつくりあげることが今後の課題である。

#### ③H19 年度の取り組みの予定

総合共同研究の仕組みを大幅に改良して、博物館にしかできない研究を進め、館全体としての研究レベルの向上を図る。

### この指標を支える項目

#### ■学術交流の推進による研究活動の活性化 –学術交流事業数

- |           |  |
|-----------|--|
| H18 の取り組み | ●分野横断的な地域研究、および研究会を実施し、異なる研究分野の交流の機会を提供した。 |
| 自己評価      | ●研究会には国際色も盛り込み、部門研究の発表会を実施するなど活発に事業を行った。   |
| H19 の予定   | ●研究会・地域研究の内容を精査して、学術交流をなお一層進める。            |

#### ■学術交流の推進による研究活動の活性化 –共同研究・プロジェクト数

- |           |   |
|-----------|---|
| H18 の取り組み | ●昨年度と同様に、予算的措置のある共同研究・プロジェクト 10 件を目標値に設定した。 |
| 自己評価      | ●文部科学省科学研究費をはじめ多数の共同研究やプロジェクトを獲得することに成功した。  |
| H19 の予定   | ●総合共同研究などを見直し、博物館らしい共同研究を促進する仕組みを検討する。      |

#### ■競争的研究資金の獲得 –科学研究費等の研究助成金採択金額

- |           |  |
|-----------|--|
| H18 の取り組み | ●競争的資金獲得のための情報交換会などを開催し、外部資金を積極的に獲得するよう呼びかけた。  |
| 自己評価      | ●科研費を中心に多数の研究資金を獲得できた。うち 2592 万円が科研費によるものであった。 |
| H19 の予定   | ●引き続き科研への申請を促進するとともに、他の助成金などへの応募も促してゆく。        |

#### ■国際共同研究の推進 –国際共同研究プロジェクト件数

- |           |  |
|-----------|--|
| H18 の取り組み | ●サバ大学及び JICA との共同事業として推進中のサバ・プロジェクトの進行管理を行うとともに、新たに科研による国際協同研究に着手した。 |
| 自己評価      | ●目標を達成することができた。  |
| H19 の予定   | ●科研による国際共同研究を適切に進め、その取り組みを積極的に展開していき、世界に情報発信できるような成果を蓄積してゆく。         |

# III 研究・資料

## 世界～地域の研究・資料を全事業にフィードバックし、 効率化・最適化を図る

**2** 兵庫県の人と自然に関する地域特性の解明、課題の解決、魅力づくりに貢献する研究を推進する

**指標：県政課題、地域課題に関連した論文著書・総説その他件数**

兵庫県に係るもの、または兵庫県の抱えている課題に係るもの

**指標：一般向け著書・総説その他数**

自費出版以外の一般向け著書、雑誌・新聞等への執筆

担当課室  
研究開発  
会議

### 県政課題、地域課題に関連した論文著書・総説 その他件数

#### 達成度

目標 80件/年 に対して

**96.3%**  
(77件)

### 一般向け著書 総説その他数

#### 達成度

目標 120件/年 に対して

**135.0%**  
(162件)

### 県政課題、地域課題に関連した論文著書・総説その他件数

#### ①H18年度の取り組み

研究開発会議を開催して総合共同研究や部門研究の進行管理を行い、研究成果の増加を図った。また、県政課題対応を担う部門研究については、研究成果発表会を実施して、成果の共有と課題の洗い出しを行った。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

目標値80件に対して77件の成果があり、達成率96.3%であった。

#### ③H19年度の取り組みの予定

県の関連部局などとの情報交換を行い、県政のニーズを把握し、有意義な研究となるように、その内容についても精査してゆく。

### 一般向け著書・総説その他数

#### ①H18年度の取り組み

月例報告会などを通して、研究者への呼びかけを行い、研究員各自の意欲を高めることに努めた。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

目標値120件に対して162件の成果（達成率135%）であった。

#### ③H19年度の取り組みの予定

館内の定期刊行物だけでなく、外部の広報誌等を通して研究内容を紹介できるような仕組みを検討する。

## この指標を支える項目

### ■県政課題の解決、提言に向けた研究の促進

—県政課題の解決、提言に資する研究テーマ選定の仕組みの整備状況

H18の取り組み	●博物館協議会等で研究課題とその成果を報告し承認を受けるとともに、あげられた意見を研究課題に反映することで仕組みの整備に取り組んだ。
自己評価	●仕組みの整備そのものが目標となり、引き続き検討をすすめる必要がある。
H19の予定	●県政学会やホームページで積極的に成果を公開するなど、現在の取り組みを継続する。

### ■時代を先導する研究の促進 —時代を先導する研究テーマ選定の仕組みの整備状況

H18の取り組み	●博物館協議会等で研究課題とその成果を報告し承認を受けるとともに、あげられた意見を研究課題に反映することで仕組みの整備に取り組んだ。
自己評価	●仕組みの整備そのものを目標とする必要がある。
H19の予定	●総合共同研究の仕組みを見直して、博物館にしかできない学際的共同研究を行い、その中から時代を先導する研究の種を拾い出してゆく仕組みを整備する。

# III 研究・資料

## 世界レベルの博物館へ、飛躍の5年間

# 3

わが国有数の博物館として、広く県民の期待に応えるために、特色ある質の高い資料を収集する

**指標：県内外のコレクションの受け入れ**

担当課室  
研究開発  
会議

### 県内外のコレクションの受け入れ

#### 達成度

目標 20 件/年 に対して

**30.0% (6件)**

### 解説

#### ①H18 年度の取り組み

研究部長や資料担当を通してコレクション等の資料受入を積極的に進めるよう研究員に呼びかけた。

#### ②H18 年度の到達状況の自己評価

平成 18 年度まで 100 件の目標に対し本年度 6 件の受入であり、年間の目標 (20 件) に達しなかった。引き続き、コレクションの情報を収集し、積極的な受け入れに努める。

#### ③H19 年度の取り組みの予定

キャラバン事業や地域研究員事業等を継続し、県民の博物館に対する認知度と信頼を高め、コレクションの寄贈意欲を高めるようにする。

### この指標を支える項目

#### ■特色ある質の高い資料の収集を担保する

-特色ある質の高い資料収集方針を定める仕組みの整備状況

H18 の取り組み	●新たな博物館構想・計画をたてるなかで、将来を見据えた資料収集の方針について議論した。
自己評価	●資料収集および管理の仕組みについて時代の趨勢をみながら議論を進めている。
H19 の予定	●新たな博物館の構想にしたがって、資料収集の方針を固めると同時にその仕組みづくりを進める。

#### ■図書文献資料の充実 -図書点数

H18 の取り組み	●書庫の整理を引き続き進め、収蔵スペースの確保を図った。
自己評価	●引き続き図書点数を増やし、雑誌なども充実させた。
H19 の予定	●さらに図書点数を増やすとともに、既存の図書資料の整理をすすめていく。

# III 研究・資料

## 世界レベルの博物館へ、飛躍の5年間

# 4

ふるさと兵庫の人と自然に関する資料を積極的に収集し、県民共有の財産を継承する中核拠点としての機能を確固たるものとする

**指標：兵庫県版レッドデータブック掲載種及び掲載箇所に関する資料の収集数**

担当課室  
研究開発  
会議

### レッドデータにブックに関する資料収集

#### 達成度

目標 H18年までに 80%収集 に対して

**40.9% (865件)**

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

昨年に引き続き、レッドデータブック記載種に対する現状の収集状況を把握し、全分野における収集状況を再検索および整理した。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

現時点での収集状況を整理した結果、全体で 40.9%の収集率である。

#### ③H19年度の取り組みの予定

レッドデータ掲載種の収蔵状況の整理を進め、重点的に収集すべきものを抽出して、引き続き資料収集にとりくむ。

### この指標を支える項目

#### ■県民の持つ資料・情報の受入の促進 -寄贈資料数

- |          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| H18の取り組み | ●昨年と同様に受け入れをすすめた。                |
| 自己評価     | ●平成18年度までの目標値である75,000点の受入を達成した。 |
| H19の予定   | ●新たな博物館構想・計画にしたがって、新たな目標作りを行なう。  |

#### ■県民の持つ資料・情報の受入の促進 -兵庫県産絶滅危惧植物（種子・生株）受入件数

- |          |  |
|----------|--|
| H18の取り組み | ●レッドデータブックの改訂により、対象となる資料が増加したが、引き続き受け入れを進めた。 |
| 自己評価     | ●全体で40.9%の収集率であり、目標に到達しなかった。                 |
| H19の予定   | ●あらためて受け入れ計画を策定し、それにもとづいて積極的に受け入れをすすめる。      |



# IV マーケティングおよびマネジメント

## すべての県民に知られ利用される博物館

# 1

広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を拡大する

指標：知名度の向上

担当課室  
企画調整室

### 知名度の向上

ひとはくの知名度

行ったことがある+知っている

49.1%

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

一昨年度、知名度 49.1%の結果を示したが、本年度はそれ以上の詳細調査をしていない。年度終期に恐竜化石の発見・発掘事業があり、多数のメディアに何度も露出したことにより知名度は格段に向上したと思われるが、実地調査はできなかった。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

恐竜化石関連でメディアへの露出回数は明らかに増加したが、回数以上に主要テレビ局でのニュース報道がなされたことにより、知名度は確実に上がったと思われる。

#### ③H19年度の取り組みの予定

恐竜関連の展示や二次発掘に向けた取り組みのホームページ、ブログ、メルマガ等による発信、新形式のセミナー、キャラバンの充実により、更なる知名度の向上に努める。知名度の数値データを何らかの形で測定できるよう検討する。

### この指標を支える項目

#### ■メディアを通じた情報提供 -新聞等掲載数

H18の取り組み

●季節ネタや活動の紹介をこまめに続けた結果、年間目標を超える 539 件の掲載があった。

自己評価

●1 月から 3 月に恐竜関連の記事等が多数掲載されたが、それ以外の時期もコンスタントに 30-40 件の掲載を続けることができた結果、目標達成に結びついたと考えている。

H19の予定

●引き続き、興味を引く内容を考慮しながら、新聞・テレビ等への効果的な情報提供を検討する。

#### ■ホームページを通じた情報提供 -ホームページアクセス数、メルマガ読者数

H18の取り組み

●トップページ写真の随時更新、イベントの最新情報の適宜アップなど、HP の新鮮さを保つことに努めた。

自己評価

●HP アクセス数は少し伸びたが、メルマガ購読数は漸減しており、より魅力的な内容の開発が必要である。

H19の予定

●日々の博物館活動を楽しく伝えるブログを開始し、一層のアクセスを誘引する。

#### ■セミナー倶楽部による直接情報提供 -セミナー倶楽部会員数

H18の取り組み

●ひとはく手帖、季刊セミナーガイド、ハーモニーのわかりやすい編集・制作・送付や、企画展プレビューへの招待など、会員限定サービスの向上に努めた。

自己評価

●各種サービスの顧客満足度は横ばい状態と思われ、会員数の増加は微増である。

H19の予定

●更なるニーズの把握とサービスの充実をはかり、満足度向上に努める。

#### ■ホスピタリティの向上 -苦情処理数・館員の対応の適正度

H18の取り組み

●館に寄せられた苦情に関しては、協議の上、適切に対応を行った。

自己評価

●個々の苦情に対して、適切に対応したことにより、大きな問題は起こっていない。

H19の予定

●寄せられる苦情に迅速・適切に対処すると共に、館員の対応について更なる意識向上を図る。

# IV マーケティングおよびマネジメント

## 柔軟で活力を生み出す開かれた博物館運営

# 2

参画と協働の理念にもとづき、開かれた博物館運営と積極的な情報公開によって博物館運営を透明化すると同時に、よりいっそうの効率化を図り、博物館活動を活性化する

### 指標：中期目標の達成

中期目標の各項目について目標値を達成したものの割合

担当課室  
企画調整室

### 中期目標の達成

#### 達成度

目標 H18年までに 80% 達成に対して

**80.0% (8件)**

### 解説

#### ①H18年度の取り組み

中期計画最終年にあたり、とくに研究資料に関する未達成の指標を達成できるよう努力したがかなわなかった。

#### ②H18年度の到達状況の自己評価

相手との関係があつて容易に達成できない指標のみが残された。

#### ③H19年度の取り組みの予定

資料やシンクタンク関連の目標を強化した次期中期計画の策定および、外部評価委員会による評価点検を実施し、効果的な計画推進をはかる。

## この指標を支える項目

### ■ 博物館運営への外部評価の実施と結果の公開 –適切な評価システムの整備状況

H18の取り組み	●2月に博物館協議会を実施し、主要事業の報告および将来構想策定委員会の進捗状況について説明し、意見を頂いた。
自己評価	●事業の外部評価は受けたといえるが、研究資料や運営を含めた全体の評価には至っていない。
H19の予定	●次期中期計画については、策定時から外部委員会による評価を受ける予定で事務を進める。

### ■ 外部資金の導入 –調査研究受託金額

H18の取り組み	●調査研究に関する受託は20件5241.6万円になった。
自己評価	●ワイルドライフ事業への研究委託など、次年度にはない委託費が相当数含まれている。
H19の予定	●調査研究に関するより多くの外部資金が得られるようさらに努力していく。

### ■ 外部資金の導入 –各種事業における外部機関の負担金額

H18の取り組み	●ボルネオジャングルスクールや、市民団体との協働活動への委託のほか、JSTによる子供向け環境教育関連の委託事業などを受けた。
自己評価	●外部資金の導入により、事業の質を落とすことなく多くの事業を実施することができた。
H19の予定	●展示やイベント、キャラバン事業など、今後ますます県民ニーズの高まる多様な事業について、外部資金を積極的に導入していくことが求められる。

### ■ 季節開館、夜間開館等開館時間の融通性の拡大 –融通性をもった開館形態の実施状況

H18の取り組み	●ゴールデンウィーク及び夏休みの無休開館、夜間開館、正月開館(1/3-1/4)を実施した。
自己評価	●開館日の拡大が次第に浸透してきており、入館者増に結びついている。
H19の予定	●引き続きこれら融通性のある特別開館を実施する。

### ■ 職員等の士気の向上 –業務改善提案・改善数やサバティカル等研究活動を活性化する仕組み等の整備状況

H18の取り組み	●事業推進会議を月1回にし、懸案の問題を検討する事業戦略検討会議を新規実施した。
自己評価	●日々の事業の拡大に伴い、中期的視野にたつて事業や研究を検討し共有する場が少ない。
H19の予定	●事業の効率化をはかり、各個人が館の使命・将来を考えられる時間を確保する。

### ■ 適切な危機管理の実施 –危機管理上重要な情報の処理の適正度

H18の取り組み	●企画調整室が中心となって危機管理にあたった。
自己評価	●危機管理マニュアルの策定までは至らなかった。
H19の予定	●想定される危機に備えて危機管理マニュアルの作成に着手する。